
ゼロ魔の世界を跳梁跋扈

rdnt

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロ魔の世界を跳梁跋扈

【Nコード】

N8039T

【作者名】

rdnt

【あらすじ】

突然現れた神にチート能力をもらった俺。

色々あってルイズに召喚されることになるんだが……。

俺はこの、ハルケギニアの貴族ってやつが前から気に食わなかったんだ！

ゼロの使い魔の世界へ、正義の鉄槌を下してやる！

アンチヘイト、原作知識あり、オリ主チートモノです！

プロローグ

俺は今、なんか光的なものに包まれていた。

俺の名前はなんだったか……。

そうだ、思い出した。

俺の名前は、神代<クマシロ>宇宙<ソラ>。

なぜか、高校から帰ってからの記憶がない。

それどころか、俺はなぜか一面、白の空間を浮いていた。

こりゃ夢だな。間違いない。

「ソラよ……」

誰だ？ あんた。

俺の目の前には、なぜか俺と同じように、浮かぶ爺さんがいた。

「わしは、神じゃ」

神？ あー、するともしかして、俺は死んだのか？

「くつくつ。人間にしては、なかなか物分りが良いではないか」

死因は、何だったんだ？

「死因？ 心臓麻痺じゃよ。たかが人間ひとりの生き死に。操作することなど容易い」

は？

俺は、あんたに殺されたってこと、か？

内心がざわつくのを、俺は必死に抑えた。

つまり、その。なんで、俺は死んだ？ 俺が死んだ、そのワケを知りたい。

「特に意味などないよ。ただ、わしが面白そうだと思っただけじゃ、くひっひっ」

なるほど……。

概して神らしい、身勝手な理由だ。
くだらない、理由だ。

品のない笑い声も、なんだか吐き気がする。

くそつ、意味もなく殺されただと。

「くく、お前も変な人間じゃな。わしが神であると知ってなお、そこまで口をきけるのじゃから」

どちらにせよ！ 死んだことに……変わりないんだろ？

それに、たかが人間ひとりの戯言を、神が気に留めるとも思わない。
い。

変に取り繕って、へりくだるだけ損というものだ。

そつだ、俺は何をすれば良い？

「ますます愉快。怒りを隠しながら、冷静に相手の目的を聞き出す精神力。やあ愉快」

ふざけるな！

「くつくつ、脅しても意味がないことは、お前が知っておるって」

のらりくらりとする神に、俺は辟易していた。

だが、だんだん覚醒してきた意識から、理解する。

この現実感の本物だ。

俺が死んだことは、残念ながら疑いようもない。

「どうじゃ、わしとゲームをせんか？」

ゲーム、だと？

「くひっひ。さようさよう。お前に特典をつけ、他世界に飛ばすのじゃ」

他世界？ それに、特典？

「慌てるな慌てるな」

口端から唾液を垂らしながら、厭らしく笑う神。
どう考えてもまともじゃない。

「行ってもらう世界は、お前も良く知る世界、『ゼロの使い魔』の世界じゃ」

ゼロの使い魔、だと？

俺には、そのタイトルに覚えがあった。

端的に述べるなら、貴族社会が成立してしまっている、腐ったルール。

現代社会を彷彿とさせる、狂った条理。

俺が平民として生まれたなら、何も成すことなく埋もれてしまう世界だ。

だからこそ、特典だな？

「そうじゃそうじゃ。お前が望む力を与える」

俺は、その力を使って何をすれば良いんだ？

「別になんもせんでよい」

何も？

思わず聞き返す。

「言ったであろう？ 単なる暇つぶしと。長きにわたり神でありつづけるためにも、徒然を慰めねばやってられんのじゃ」

良くも悪くも、俺は生きられるらしい。

特典、か……。

そうだな。『どんなモノにも害されない強靱な体』は、可能か？

「くひつ、おまけで不老不死もつけてやってよいぞ」

なかなか融通がきくじゃないか。

少し感心した。

だがこれだけじゃ安心できない。

次の願い。これが承服されなければ、意味がない。

これはどうだ？ 『何者にも干渉されない能力』これが欲しい。

対象は人に限らず、神であつてもだ。

「と、いうと？」

意図するところが読めないのか神よ。

例え順風満帆に人生を謳歌したとして、途中で神の介入があったらどうしようもないじゃないか。

今度の人生は、神に殺されることなく楽しみたいんだ、俺は。

「くひっ……くひっひっひっひ……よいよい、よかるう。認めよう……お前の望み」

他は、特にいららないな。

死にさえしなければ、いくらでも楽しみようがある。人生を。

この二つさえ守ってもらえれば、俺はそれでいい。

「では送り出すぞ、貴族の息子として転生させてやってもよいが、一応聞いておこう。お前はどっしたい」

俺は……。

そうだ。俺をサイトの代わりに、ルイズに召還させるってことは可能か？

「わざわざ平民として扱われよう？」

いや、そうじゃない。

さっきもらった能力を使えば、貴族にだって傷つけられないんだろ？

「むろん、そうじゃな」

なら俺が恐れるのは、思惑と外れた展開が起こることだ。うっかり原作以前に介入して、キャラクターの性格が改変でもされると、イレギュラーが増える。

それに俺は、親からもらったこの容姿を、思いのほか気に入っているんだ。

「色々考えておるのう。くくく、実に結構！ ルイズにお前を召還させよう……それでよいな？」

ああ、それで構わない。

もう、憂いはなくなった。

こうして考えてみると、この神に選ばれて良かったんじゃないかとすら思えてくるな。

目の前に、鏡のようなものが浮かんでいる。
これが召還ゲートなのだろう。

世話になったな神。

俺はなんの躊躇もなく、鏡を抜けた。

鏡を抜けて気づく。
ぺっぺ、なんだこりゃ砂埃か？

そっぴや、これから俺のご主人様になるルイズは、魔法の失敗ばかりするやつだったな。

にも関わらず、傲慢な態度が、一読者としてどうしても赦せなかった。

無能は無能なりに、引っ込んでいれば良いものを。

俺は神に力をもらい、このハルケギニアを、貴族社会をぶっ潰しにきたんだ！

少し浮かれてしまったな。

俺はハルケギニアの大地へ、記念すべき第一歩を踏み出した。

その拍子に、体が宙へと浮き上がっていく。

は？

手を動かそうが、足を動かそうが変わりなく、俺の体はひたすら空へと向かっている。

なんだこれ。なんだこれ？

砂煙を上部から抜けた。

はるか地面に、ルイズたちトリステイン魔法学院の生徒が見える。あの光っているのはコルベールだろう。

言ってる間に、どんどん浮かんでいく。

レビテーションか！？

不意打ちで魔法をかけられた可能性を考える。

いや、神にもらった能力で、俺への魔法の干渉はできないはずだ。

で、あるはずなのに！

いかに足掻こうが、俺が上へと浮かんでいく事実には、なんら変わらない。

くっ！ どうなってる！！

人間が豆粒ほどの大きさになって、やっと気づいた。

ああ、そうか……。

どうやら俺は……。『重力の干渉』を、振り切ったらしい。

エピソード

私が宇宙を彷徨うようになって、幾ばくの年月が流れたのだろうか。

思えば一介の高校教師でしかない私が、無駄な野望を抱くものはなかったのだ。

神様にもらった能力は、正しくその機能を發揮している。

『何者にも干渉されない能力』

私も、重力の干渉を振り切り、宇宙へと旅立った当初は思ったものだ。

いつか神様が助けに来てくださる、と。

自分で言い出したことなのに、どこかに救いがあるのではと、甘い考えを持ってしまうていた。

結論から言えば、神様に不正はなかったといえる。

私は、『神様にすら干渉されない能力』を手に入れた。そうしか考えられない。

宇宙に旅立つてから、何百万回もの眠り、そして覚醒を繰り返した。

重力を持つ恒星に、引き寄せられることもない自由。

何者の手も差し伸べられない、この漆黒の海を、ただただ揺蕩っていたのだから。

また、神様は素晴らしい能力をお与えくださった。

『どんなモノにも害されない強靱な体』

『不老不死』

思わず笑ってしまった。

この宇宙空間。空気がなく、ひたすらに寒い劣悪な環境。

にも関わらず、私の肉体は朽ちることも、傷つくこともなく在り続けているのだから。

ときどき、自分の存在について考えることがある。

どんな生物もいつかは死に、何かに生まれ変わるとするなら。

私はいつたい、何者であるのかと。

子を残すことが生物の役割とするなら、もはや私に、それは不可能なのだろう。

私はもしかすると、既に生き物ですらないのかもしれない。

生き物ですらない、そんな永遠に存在し続ける私には、子孫など必要ないのかもしれないな。

いつか、神様が仰られた言葉が脳裏をよぎる。

長きにわたり神でありつづけるためにも、徒然を慰めねばやってられんのじゃ。

超越した者だと思っていた神様。

それがとても、近い次元の存在に感じられた。

今となつては確認のしようもないが、神様もまた、誰かに能力を授かり、神様になられたと。

そう考えてみるのも、面白い。

もっ少し、無欲に生きれば良かったのだろうか。

そうすれば、とつくに安らかな死を迎えられていただろう。

もっ少し、強欲に生きれば良かったのだろうか。

そうすれば、神様と同じ存在になり、他者に能力を与える立場になつていたかもしれない。

現在私に出来る楽しみと言えば、こうして過去を振り返り、空想することしか残されていなかった。

そういえば、あれはいつだったか。文明を持つ星に出会ったことがある。

その星に接近した私を、先住民が宇宙戦闘機で迎撃してきたのだ。私は、嬉しかった。

涙が溢れた。

やっと、人に巡り合えたと思えたからだ。

くすぐったいだけのレーザー砲も、私にとっては喜びだった。

だが、その星はもうない。
私が壊した。私が殺した。

私の力に、その星は耐えられなかったのだ。

重力にも影響されず、ただ貫通するだけの私。
マントルを突き抜けるとき、私という『何者にも干渉されない異物』は、その星を支える重力ごと破壊したらしい。

かの星の終局は、限りなく美しかった。
儚く、淡く散りゆくさまは、軽率な発言かもしれないが、なににより羨ましく思えた。

帰る星がなくなったことで、燃料が続く限り、私を追いかけてきた者がいた。

滅びた星、最後の生き残り。
彼は、戦闘機の操縦士であった。

そして、私の人生で一番最後に作った友だ。

友との会話は、今も私に、大いなる救いを与えている。
残念なことに、機の中にあるはずの友の顔は伺えなかったが、コミュニケーションは成立した。

「私は死ぬこともなく、宇宙を漂い続ける存在である」
私がそう述べると友は。

「なるほど。死ねる我々は幸せなのだな」

と励ましてくれたのだ。

友との別れは、まもなく訪れた。

私は死ねない。

これから先も、死ぬことはない。

億分の一だろうか、私を受け止められる惑星、文明に出会うまで。
私はこの、宇宙空間を放浪し続けるだろう。
それこそ、途方もない時間を。

私を観測できる存在がいれば、どうか、私のことを覚えていてほしい。

私の名前はそう、何であつたか……。

そうだ、思い出した。

私の名前は、神代<クマシロ>宇宙<ソラ>。

神の退屈しのぎにより、この宇宙を彷徨うことになった
人間だ。

あとがき

ようやく書き終えることが出来ました。

飽き性の私が、こうして完結までいけたのも、ひとえに支えてくれた皆様のおかげです！

思えば色々なことがありました。

でも、あっという間に過ぎ去った気がします。

この作品は、ひとまずここで終了です。

しかし、物語はまだ終わっていません！

いつかまた、皆さんの前にソラが現れると思います！

これからも、ソラを好きでいてくれたら、これほど嬉しいことはありません！

長い間、
応援ありがとうございました！

あとがき（後書き）

『タイトル』『あらすじ』『タグ』
『プロローグ』『エピソード』『あとがき』と、全て含めて完結する作品です。

『あとがき』の内容に深い意図はありません。
1日での投稿となります。ただのショートショートです。

変転していく内容に、怒りを覚えた方もおられるかと思います。
この場をお借りし、謹んでお詫び申し上げます。

ここまでお付き合いくださり、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8039t/>

ゼロ魔の世界を跳梁跋扈

2011年6月5日06時34分発行